

居酒屋

ほったくり

秋川滝美 Takimi Akikawa

8

目次

黄金色きんいろの出汁だし……………

219

黒豆ゼリーにとけた心……………

163

魔女につかまれた胃袋……………

99

女たちの仕返し……………

53

おじいちゃんの記憶……………

5

おじいちゃん  
の記憶

千代田の海防隊

千代田の海防隊

屋下がり、東京下町で居酒屋『ぼったくり』を営む美音は、散歩に出かけようと引き戸を開けた。先週からずっと天気が思わしくなく、もう灰色の空には飽き飽きしていた。だが、今日の空は晴れ渡り、秋の盛りに相応しく深い青を呈している。

美音は日々白んでいくような春の空も好きだが、冬に向けて色を深めていく秋の空も大好きだ。特に、まっすぐに伸びる飛行機雲を見つけたときなど、背景の青との対比が美しく、いつまでも見上げていたくなる。

仕込みも終わった秋の午後、こんなに気持ちのいい一時を休憩に費やせるというのはなんとも贅沢なことだ、とありがたく思いながら、美音はいつもの散歩コースである『ショッピングプラザ下町』に向けて歩き出そうとした。

そこにやってきたのは、三日に一度、決まって『ぼったくり』を訪れる常連客のウメだった。

「こんにちは、ウメさん。やっと晴れましたね」

「秋の長雨とはよく言われるけど、本当に久しぶりのお天道様だ。やっぱり青い空を見ると気持ちも明るくなるねえ」

「本当ですね。あら……」

そこで美音はウメが手にしているレジ袋に目を留めた。ばんばんに膨らむほど詰め込まれた袋を見て、にっこり笑う。

「今年のお芋掘りも無事に終わったようですね」

「無事とは言いがたいよ。台風が来てたせいで、ずいぶん遅めの芋掘りになっちゃったんだってさ。でもまあ、やっと終わったみたいだね」

「遅くまで土の中にあつたのなら、きつと大きなお芋が穫れたことでしょう」

「どうだかねえ……あたしには去年と変わらないように見えたけどね」

「それは残念」

そんな会話を交わしたあと、ウメはびよこんと頭を下げる。

「美音坊、いつもいつも面倒なことを頼んで申し訳ないけど、よろしく頼むよ」

「了解です！」

右手を上げて敬礼した美音に、ウメは嬉しそうに笑った。

商店街から少し離れたところにあるあおはずく幼稚園は、園庭に小さな畑を持っていて、毎年六月になると年長組の園児たちがサツマイモの苗を植える。

何本か並んで作られた畝に、ひとり一本ずつ苗を植え、当番を決めて水をやりながら実りの秋を待つ。空の青が濃くなり、雲が鱗の形になるころ、子どもたちは待ちかねたように運動靴を長靴に履き替え、畑に走っていく。

葉や茎の大部分は先生方が予め切っているので、地面から出ているのは数十センチの茎のみ。その茎の根元を、子どもたちは喜び勇んで掘り始める。茎に繋がる根っこを切ってしまうように丁寧に丁寧……

茶色の土の中を掘り進み、赤紫のサツマイモを見つけた子どもは盛大に歓声を上げるのだ。園児は毎年入れ替わるけれど、あの歓声だけは毎年ちつとも変わらない、なんともかわいらしい、とウメは目を細める。

もちろん、美音も同じ思いだ。親に手を引かれて園に向



かう子どもたちの手に、長靴の入ったレジ袋が提げられていると、ああ今日はいよいよ……とほほえましく見送る。

それと同時に思うのだ。

今日は幼稚園のお芋掘り。それなら、きっと午後にはウメさんが来てくれる、と……

聞くところによると、あおはずく幼稚園は地域親交に重点を置いているそうだ。

昨今核家族が著しく、祖父母と暮らす子どもは少ない。そんな子どもたちに、少しでもお年寄りと触れあってもらいたいという思いもあって、あおはずく幼稚園は行事のたびに地域の老人会のメンバーを招く。

七夕やクリスマスのお遊戯会では園児のかわいい歌や踊りを見られるし、園内夏祭りでは園児が打ち鳴らす太鼓に拍手喝采、小さな御神輿と一緒に担ぐ。

秋が来ればお月見団子を、師走になればお餅を、園児とお年寄りが一緒になって作るのだ。

ウメはそんな幼稚園との交流に欠かさず参加、わけても十月に行われるお芋掘りを待ちわびている。

焼き芋や蒸し芋にかじりつく子どもに目を細めたり、お客さん用にと保護者が作ってくれたスイートポテトに舌鼓を打ったり、なんとも楽しい行事なのだそうだ。

だが、行事そのものよりウメが楽しみにしているものがある。それは、半年近くサツマイモを育て、ようやく役目を終えたばかりの茎だった。

園児たちが畑に入る前に切り取られた茎は、たいてい畑の片隅に山積みになれ捨てられるのを待つばかりになっている。

ウメは毎年幼稚園の許可を得て、その山の中から柔らかそうな部分を摘んで袋一杯持って帰るのだ。

「今時こんなものを食べる人はいないかもしれない。貧乏くさい、って言う人もいる。でも、あたしはこれが大好きでね。店で買えるようなもんじゃないし、農家にでも頼めば分けてもらえるのかもしれないけど、そんな知り合いもない。ほんと、あおはずく幼稚園様々だよ」

そう言っただけは、大きなレジ袋一杯に詰め込まれたサツマイモの茎を、悪いね、申し訳ないね、なんてさんざん謝りながら美音に渡す。

今日もウメは、サツマイモの茎が詰め込まれた特大のレジ袋を片手にやってきた。そして、店に入り、子どもたちと過ごした時間について楽しそうに語ったあと、再びすまそうに頭を下げた。

そんなウメに、美音は笑顔を返す。

「ご心配なく。いつもどおり、ウメさんが食べきれない分はうちでいただきますし、私も大好き。お客さんの中にもこれがお気に入りって人がけっこういらっしゃるんですよ」

「そうかい？ ならいいけど……」

そしてウメはちよつと安心したような顔になって、じゃあまた夜に……と帰っていく。そんなやりとりまで含めて、サツマイモの茎を料理するのは、美音の秋の行事のひとつだった。

「うーん……面倒くさい。せめて、お芋のほうももらえればいいのになー」

美音の妹の馨が、呻くように言う。

年に一度しか手に入らない珍しい食材である。ウメにも早く味わってもらいたいし、店にも出したい。ということで、美音は馨にも下拵えを手伝ってもらったのだ。

馨はサツマイモの茎が嫌いというわけではないが、サツマイモそのもののほうがより好ましいのだろう。

「なに言ってるの。子どもたちが一生懸命育てたものなのよ。幼稚園でおやつに食べて、残った分はおうちに持って帰りたいに決まってるじゃない」

「それはわかってるけどさー。みんな今日は、サツマイモの天ぷらとか大学芋とか作ってもらおうだろうなあ……」

「でしようね」

お芋掘りに来られなかった家族に、『ぼくが掘ったお芋なんだよ』なんて誇らしげに言う子ども

の顔が目に浮かぶようだった。

姉妹で顔を見合わせ、ふふっと笑ったあと、馨がまた口を開いた。

「いつそ茎も持っていけばいいのにね。これ、面倒だけどそこそこ美味しいし」

「食べられるものだって知らない子のほうが多いんじゃないかしら。私だって初めて見たときはびっくりしたもの。え、これ、食べるの？ って」

「それこそ、ウメさんとかが教えてあげればいいじゃん」

昔ながらの食べ物とかさ、と馨は珍しくまっとうなことを言う。そんな馨に、美音はクスクス笑いながら、以前ウメから聞いた話を伝えた。

「ずっと前に、一度だけ教えてあげたことがあったんだって」

もう十年以上前のことらしい。ウメも今より若くて元気があったのだろう。子どもたちにあの味を知ってほしいと思ったウメは、芋掘りの翌日、自らサツマイモの茎を料理して幼稚園に届けてみたそうだ。

「へえ……それで？」

「残念ながら、やっぱり本体のほうが美味しいって不評。当然よね、相手は子どもだもの。中には気に入ってくれた子もいたみたいだけど、作り方を教えたら親御さんたちのほうが面倒くさがっちゃって……」

「あー……確かにね」

よほどあの味が気に入っているか、深い思い入れでもない限り、あれだけの手間をかける気にはならないだろう、と馨は大きく頷いた。

「ということで、ウメさんはそれきり子どもたちに食べさせるのは諦めたそうよ。それに、子どもたちがみんな気に入っちゃったら、ウメさんが茎をもらえなくなっちゃうし」

「そっちのほうが困るよね」

「ウメさんがもらってきてくれなきゃ、うちだっておこぼれにありつけない。大変大変！」

まだ人參の葉っぱのほうが入りやすいぐらいだよー、なんて言いながら、馨はせっせとサツマイモの茎を掃除する。

ハート形の葉っぱを取って、茎の皮を一本一本剥いていく。ちょっと茹を剥く作業に似ているのだが、これがけっこう面倒くさくて、ウメは自分ではもうやりたくないのだそうだ。

「ウメさん、『昔は庭でサツマイモ作って、自分で料理したんだけどねえ……』って、いつつもすまなそうにしてるわ」

それでも、剥いた茎を胡麻油で炒め、醤油とみりん<sup>しょうゆ</sup>で味を付けたきんぴらは独特の味わい。年に一度ぎりしか食べられないこともあって、どうしても諦められないのだ、と言う。

「あたしも聞いたよ。『年を取るって嫌だね。それまで平気でやってきたことがどんどん億劫おっくうになつてさ。掃除だつて料理だつて本当に面倒になつちまう』って、言つてたね」

これで相手でもいれば別なんだろうけど、自分だけのためとなつたらねえ……と、少し寂しそうに笑つたウメの姿を、姉妹はよく覚えていた。

ウメはしばらく億劫になつたあれこれについて語り、やがて話題はあおはずく幼稚園のお芋掘りに招かれた話に移つた。

『お芋掘りに行つたら、畑の隅に美味しそうな茎が捨てられていたんだよ。あたしはあれが大好きなんだけど、もう皮を剥むいて料理する根気がなくてね……』

『あ……お芋の茎……きんぴらにすると美味しいですよ。それなら、うちで引き受けましょうか？』

そんな会話がきっかけで、その翌年から、ウメは幼稚園からもらつてきたサツマイモの茎を『ぼつたくり』に置いていくようになったのだ。

料理したサツマイモの茎をふたつに分け、片方をウメに、もう一方を『ぼつたくり』で出す。それを見た常連たちは、『お、ウメ婆ばあのおこぼれだな』とほっこり笑うのだつた。

+

——見かけない子ね……

美音がその男の子を見た第一印象は、そんなものだった。

馨とふたりでせつせとサツマイモの茎の皮を剥き、きんぴらに仕立てた。ふたりがかりでやつたおかげでなんとか散歩の時間が残り、美音はやれやれと引き戸を開ける。

いつもどおり『シヨッピングプラザ下町』に行こうと歩き出したとき、店の脇にある電柱近くに所在なげに立っていたのが、その男の子だった。おそらく今年小学校に入ったぐらい、親の付き添いなしに外で遊ぶぶことをようやく許された年齢といつたところだろう。

——もしかしたら、近くの店に入っている誰かを待っているか、あるいは友達と待ち合わせでもしているのかしら……

知らない大人が声をかけて怯おそえさせても悪いし、そもそも『知らない人に声をかけられても返事をしてはダメ』などと、学校や親から指導を受けている可能性が高い。寂しい話ではあるが、子どもを狙う不届やからきな輩が多い昨今、身を守るためには仕方ない。そう思いながら、声をかけることもなく通り過ぎた。

美音が『シヨッピングプラザ下町』から戻ってきたときには、その男の子はもういなかった。友達が出来たか、家に帰つたのだろうか。

ところが、開店時間が近くなり、店の前を掃除するために出ていった馨が戻ってきて首を傾げて言う。

「お姉ちゃん、なんか子どもがいるんだけど……」

馨が戸惑いがちに口にした台詞で、美音は昼間の男の子を思い出した。

「一年生ぐらいの男の子？」

「たぶん。ちっちゃい子の年ってわかんないけど……」

「薄いブルーで長袖のTシャツを着てなかった？」

「あ、そうそう、その子」

「じゃあやっぱりあの子だ……。私が散歩に出かけたときにもいたのよね……」

てっきり家に帰ったとばかり思っていたけれど、また戻ってきたらしい。

秋の日はもう落ちかけている。家に帰ったほうがいい時刻なのに……。と気になった美音は、店の外に出てみた。

引き戸が開いた音で、はっとしたように男の子が美音を見た。目が合った瞬間、男の子は口を開きかけ、しかし言葉を発しないまま黙り込む。

「どうやら美音、あるいは『ぼったくり』に用があるらしい。となると放置もできず、美音はやむなく声をかけた。」

「うちになにかご用かしら？」

走って逃げるべきか、返事をすべきか……

男の子はしばらく迷っていたようだったが、意を決したように口を開いた。

「サツマイモの茎……」

いかにも小さな子どもにありがちな、目的の言葉だけの台詞だった。

『誰が』でもなければ、『なんのために』でも、『どうしたい』でもない。出てきたのは、名詞だけ。

「サツマイモの茎が欲しいの？」

「お店にある？」

「うん。あるわよ？」

美音の答えを聞いて、男の子はポケットから小さな財布を取り出した。

アニメヒーローのイラストのついたコインケース。それを美音に差し出して、蚊の鳴くような声で言う。

「ください」

真っ赤なコインケースと男の子の顔を交互に見比べて、美音はふっと笑った。

「じゃあ、お客さんね。とりあえず、お店の中に入って」

お客さんと認められて安心したのか、男の子は黙ったまま美音についてくる。

お客さんといってもまだ店も開けてないし、うちは原則、未成年のお客さんはお断りなんだけど……と心の中で思ったことは内緒だった。

「馨、御新規さんよ」

「あれ……？」

そんな声を上げ、馨はまじまじと男の子を見た。もちろん、さっきまで店の前で様子を窺っていた子だと気付いているのだろう。姉がなぜ、彼を店内に招き入れたのかわからず戸惑っているに違いない。

「なにか飲み物でも……」

昨日までと打って変わって、今日は天気がよく、空気が乾いている。子どもは汗を掻きやすいし、きつと喉が渴いているだろうと考えた美音は、とりあえず飲み物を勧めることにした。

冷蔵庫の中身をざっと見て、自分たち用に入れてあったアイステイーを取り出す。

「桃の香りの紅茶、飲める？」

「あ……うん……」

男の子の返事に頷き、美音はアイステイーを小さめのグラスに入れた。一方、馨は、まあお座んなさい、なんてウメみたいな口調で男の子をカウンターに誘う。

はいどうぞ、とグラスを渡すと、男の子はごくごくと元氣よく飲み始め、ほどなく飲み干してしまった。やはり、相当喉が渴いていたらしい。グラスをカウンターに置くのを待ちかねたように、馨が声をかける。

「えーっと……とりあえず名前を教えてもらってもいい？ あ、でも嫌ならいいよ」

馨は、名前を知ってたほうが呼びかけやすいし、と言いつつ諷刺のように言う。おそらく彼女も美音同様、昨今の子どもに指導されている『知らない人との接し方』を気にしたのだろう。

「ハルキ」

姉妹の心配をよそに、男の子は一瞬きよとんとしたものの、すぐに名前を口にした。まだ、誘拐などといった危険に無頓着なのかもしれない。

「了解。じゃあ、ハルくんだね。ハル君は何年生？」

「二年生」

——一年生、もしかしたら幼稚園かも……と思ってたけど、二年生だったのね。それにしてもこれぐらいの子って、みんなこんなに言葉が少ないのかしら。

美音はちよっと首を傾げてしまう。美音が知っている子どもは裏のアパートの早紀姉弟とシンゾウの孫のカノンぐらいだけれど、彼女たちはもう少し多弁だった。とはいえ、それは人それぞれ、ハルキはとりわけ無口なタイプなのかもしれない。

「で、二年生のハルくんは、どうしてサツマイモの茎が欲しいの？」

幼稚園の子どもの評判は今ひとつだったとウメは言っていた。ハルキはそれよりもひとつ、ふたつ年上ではあるけれど、サツマイモの茎の熱狂的ファンだとは考えにくい。そもそも食べたことがない子のほうがずっと多いだろう、と不思議に思いながら美音は訊いてみた。

ハルキは、どう答えていいかわからないといった顔で、一生懸命言葉を探している。言葉が見つからなくてだんだん焦っていく様子が伝わってくる。見かねた馨が声をかけた。

「ゆっくりでいいんだよ。まずね、そのサツマイモの茎は誰が食べるの？ ハルくんかな？」

「違う」

「じゃあ誰かにあげるの？」

「おじいちゃん」

「おじいちゃん？ おじいちゃんはサツマイモの茎が好きなの？」

「わかんない」

そこで馨は、うーん……と眉を寄せ、かがみ込んでハルキと目の高さを合わせた。

「わかんないのか……それは、困ったね。それでも、ハルくんはおじいちゃんに食べてほしいんだよね。どうしてだろう？」

「だって……おじいちゃん、ずっと『サツマイモの茎、サツマイモの茎』って言ってるんだもん」

そこでようやく、ハルキの口から複数の言葉が出てきて、美音と馨はほっとする。だが、ほっとしている場合ではない。事情は半分もわかっていないのだ。

馨は引き続き事情を訊ねる。

「うーんと……ハルくんは今、おじいちゃんと一緒に住んでるの？」

「うん」

「おじいちゃんの年はわかる？ いくつぐらいかな？」

「知らない」

そりゃそうよね、と美音は思う。

一緒に住んでいる家族の年齢をはっきり答えられる小学二年生の男の子は、そんなにいないだろう。どうかすると両親の年齢だって怪しいものだ。馨もそう思ったらしく、質問の形を変えた。

「ハルくん、干支<sup>えと</sup>って知ってる？ 猿とか西<sup>とり</sup>とか、聞いたことない？」

「わかんない。でもこの前ママが『おじいちゃんは今年ペーじゅのおいわいだ』って……」

「ペーじゅ……？ 色かな……」

「馨、色じゃなくて、八十八歳でお祝いするほうじゃない？」

「あ、米寿<sup>べいじゅ</sup>のお祝いか！ 八十八歳なんだ……お元気で何よりだね」

馨の言葉を聞いて、ハルキはひどく困った顔になった。何をそんなに困惑しているのだろう、と

美音は首を傾げる。もしかして、ハルキの祖父は病気のだろうか……

「ハルくんのおじいちゃん、どこか具合が悪いのかしら？」

「ぼけちゃったんだって」

「ぼけちゃった……？」

「なんでも忘れちゃうって、ママが言ってた」

認知症が始まっているのだろうか。年齢からすれば決しておかしくはない。

身体が丈夫なままに認知症が始まると、確かにまわりは皆困った顔になる。

どこも悪くないのに、記憶がどんどん消えていく。家族の顔も忘れるし、食事をしてても食べたこと自体を忘れてしまう。

外に出かけても家に帰る道順を忘れ、排泄や睡眠のリズムが狂い、昼夜が逆転。家族はその対処に困り果てる。

おそらくハルキはそんな両親の顔を思い出して、自分も困った顔になっているのだろう。

「もうすぐ『かいごしせつ』ってどこにいくんだって……」

パパがそう言ってた、と呟いたあと、ハルキは泣きそうな顔になった。

美音と馨は顔を見合わせてため息をつく。

以前、『ぼったくり』の客であるノリが、沖縄の祖父のことを心配して相談を持ちかけてきたこ

とがあった。だが、ノリの祖父は認知症とはいえ、初期も初期。介護サービスの助けを得ながら、まだまだひとりで生活ができる状況だった。ハルキの祖父はそこからさらに症状が進んでいるのだろう。

家族は介護に疲れ果て、もう一緒には住めないと判断したに違いない。なんとも切ない話だった。

「お父さんとお母さんは、お仕事をしつらっしやるの？」

「せんせい」

「ふたりとも？」

「うん」

ああ、それは厳しい。あまりにも厳しい状況だ……

美音はさらに気が重くなる。

昨今の教員は激職だ。昔だってそうだったのだろうが、最近は特に、子どももその親も意識が高いというか、とにかく難しい。学校にまつわるあらゆることに時間を取られ、自分たちの家族のために割ける時間はどんどん減っていると聞く。

そこに介護の必要な認知症の親を抱えては、仕事はおろか、生活そのものに支障を来す。

仕事への責任感と年老いた親の介護。そのふたつを天秤にかけるなんて間違っているとわかっていても、あえてそれをしなければならぬ。そして、苦渋の選択で介護施設を選ぶ。

介護施設はどこも入所待ちの長い列ができています。受け入れ先があったこと自体がラッキーなのだ、自分たちの至らぬ介護を受けているよりもそういう施設に入ったほうがずっと厚い介護を受けられるのだと、自分たちに言い聞かせて……

ハルキの家族の事情はわかった。だが、それとサツマイモの茎の関連性は未だに不明だ。馨は諦めることなく、ハルキから答えを引き出そうとしていた。

「それで、どうしてサツマイモの茎なのかな？」

「何が食べたい、って聞いたらサツマイモって……」

介護施設に行く前に、せめて好きなものを食べてもらいたい――

そんな思いから、家族は祖父に好物を訊ねたのだろう。

「ママ、いろいろ作ってたんだ……」

「焼いたり、蒸したり？」

「天ぷらとか……あと、なんかお菓子みたいなもの……」

「スイートポテトとか大学芋かな？ バターが入ってたり、甘いタレがついたり……」

「あ、うん、そういうの……」

『サツマイモ』という答えが返ってきたため、焼き芋や蒸し芋、天ぷら、唐揚げ、スイートポテトや大学芋、きんとんに芋ようかんに至るまで、およそ考えられる限りのサツマイモを用意したので

ろう。けれど、そのいずれにも、ハルキの祖父は首を横に振ったらしい。

「もう考えつかないってママが言って、それでおじいちゃんが『クキ』って……」

それで家族は、ハルキの祖父が食べたいのはサツマイモそのものではなく茎なのだと察した。だが、茎だと聞いた家族はもっと困り果てた。

サツマイモの茎なんて店で売っているものではない。ハルキの両親もなんとかならないかと努力はしたに違いないが、やはり手に入らなかったのだろう。

おじいちゃんの介護施設の入所日は迫る。せめて家にいる間に好きなものを、食べたいものを食べさせてあげたい。それなのに、おじいちゃんが一番食べたいものは手に入らない。

「それでどうしたの？」

「ぼくが知ってたの」

「サツマイモの茎があるところ？」

「うん。学校」

「あ、そうか……理科でやるよね！」

確かに、このあたりの小学校ではサツマイモの栽培をする。美音も馨もやった記憶があった。

ハルキの言葉で、小学校の教員をしている父親は、四年生が理科の授業でサツマイモを育てていたことを思い出したようだ。

だが、学校に行けばサツマイモの茎がある！と家族が顔を輝かせた次の瞬間、父親ががっくりうなだれたという。

「なかつたんだって」

ハルキの父曰く、十月に入っただけで四年生たちが大騒ぎで芋掘りをしていた。

大きい、小さい、太い、細いと、それぞれが掘った芋を比べ合っていたし、給食のメニューにも入れられていた。先週のことだから、もう茎は処分されているだろう。

近隣の小学校にしても幼稚園にしても、たいてい十月早々に芋掘りを終わらせる。だから、今年はどうも終わっているはずだ。農家を探し出したところで同じだろう、と両親が話していたそう。

「でもぼく……」

「諦められなかった？」

「そうなの」

家庭環境から想像すると、小さいころからハルキの世話をしてきたのは祖父母なのだろう。

ハルキにしてみれば、いつもそばにいてくれたおじいちゃんとおばあちゃんだ。おばあちゃんの話は全然出てこないから、今はおじいちゃんだけなのだろうが、とにかく一緒に遊んだり、勉強を見てくれたり、おやつを用意してくれたたりした人なのだ。

認知症になって、いろいろなことを忘れてしまったからといって、ハルキがおじいちゃんのことを忘れたわけじゃない。大好きなおじいちゃんのために、なんとかサツマイモの茎を探したい。

そんな気持ちがあっても不思議ではなかった。

「ぼく、探したんだよ」

学校が終わってから、あちこちを探し回った。もしかしたらどこかの学校に残っていないか、庭に生えていないか、と目を皿のようにして探した。その結果、ようやくあおはずく幼稚園の園庭に残っているサツマイモを見つけたのだ、とハルキはちょっと自慢げに言った。

それを聞いて美音は、ウメの話を思い出した。

「そういえば、予定していた日が台風と重なって、お芋掘りがずいぶん遅れたってウメさんが言っていたわ」

おそらく、今年のおおはずく幼稚園のお芋掘りは、この界限で最後だったに違いない。最後の芋掘り、最後のサツマイモの茎……ハルキはそれを見つけたのだ。

「いつ見つけたの？」

「昨日」

「誰かに知らせた？」

「パパとママ」

夕食の席でハルキから話を聞いた両親は大喜び。早速、明日にでも園に頼んでみると言ってくれたそうだ。

「でも、やっぱりなかったの」

ハルキの目から涙が零れそうになっていた。きつと、そのときの失望を思い出したのだろう。

幸い今日は小学校の先生たちの研修会があるそうで、給食を食べて下校になった。

家に飛んで帰るなり、あの幼稚園に行ってみたのに、畑にはもうサツマイモはなく、茎もなかった。

「タッチの差で、掘られちゃったってわけか……」

「朝一番で茎を切つて、袋に詰めてゴミ収集に出しちゃったんでしょね」

サツマイモの一本の苗から育つ茎はかなり長い。畑全体ともなればけっこうな量になるし、園庭にいつまでも置いておくわけにもいかない。朝一番で茎を切つて、ウメが持ち帰りそうな分だけを残して処分したに違いない。

せつかく見つけた最後のサツマイモだったのに、と泣きそうになっていたとき、目の前を大きなレジ袋を持ったおばあさんが通った。袋には、なんだかつルのようなものが入っている。

あれはもしかして……!? と思ったハルキは一生懸命そのおばあさんを追いかけて、『ぼったくり』に辿り着いた。

おばあさんは店の中に入り、しばらくして出てきたときにはもう袋は持っていないかった。

この店は食べ物屋さんみたいだし、おばあさんに譲ってもらうよりもお金を出して買えるならそのほうが簡単かもしれない。

急いで帰って自分のお小遣いが入っている財布を持って戻ってきたものの、店に入る勇気はない。かといって帰るに帰れず、ずっと様子を窺っていた――

一語ずつしか進まないもどかしい会話の果て、ようやくハルキから聞き出したのはそんな事情だった。

「はあ……ハルくん、すごいよ。よくそれだけひとりで考えられたね」

馨がひどく感心している。

言葉はものすごく――もしかしたら年齢以上につたないのに、頭の中は随分しっかりしている。男の子ってこういうものなんだろうか……と美音と馨は本当にびっくりしてしまった。

「それで、おじいちゃんにサツマイモの茎を持っていつてあげたいのね?」

そう言った美音に、ハルキは大きくこつくり頷いた。

「よくわかったわ。どれぐらいあればいいのかしら?」

美音に訊ねられ、ハルキはまた赤い財布を差し出した。

「これだけ……」

美音はその財布をじっと見た。

お腹が空いた子どもに自分の顔を差し出して食べさせるヒーローが、力強く拳を突き出している。ハルキはそのヒーローのように、自分の身を削ろうとしていた。

お小遣いが入った、大事な財布。小銭ばかりかもしれないが、けっこう膨らんでいる。もしかしたら、ほしいものがあつて貯めていたのかもしれない。この財布からお金を出させるなんてできるわけがなかった。

ところが、美音の困ったような視線をハルキは逆の意味に取つたらしい。

「足りない……？」

また泣きそうになっているハルキの頭をくるくると撫で、美音は言った。

「お金はいらないわ」

「でも、知らない人からものをもらつてはいけません、ってパパもママも先生も!!」

そこだけやけにすら言うところを見ると、日頃から何度も言い聞かされているのだろう。

やっぱりね……と思いつながら、美音はサツマイモの茎のきんぴらを小さな使い捨て容器に詰めた。

その一方で、馨に指示して、メモ用紙に『ぼつたくり』の連絡先と美音の名前を書かせる。

そして最後に、両方を紙の手提げ袋に入れた。

「このお店の連絡先を入れておくから、お父さんかお母さんに見せてね。それで、ここに電話してくださいって伝えて。そしたら、どうしてこういうことになったか説明してあげるから」

美音の言葉に馨が追加する。

「ハルくんはちゃんと説明できると思うけど、お母さんたちもそのほうが安心するから」

親と子どもの両方に接する機会が多い教員夫婦なら、子どもは時として、自分に都合のいい説明しかしない場合があることを知っているはずだ。

それが故に、我が子の説明に不安を覚えるかもしれない。それに、どこの誰からもらったかわからない食品を口にするのは怖いに決まっている。

「お忙しいところ申し訳ありませんが、なるべく早く電話してください、って伝えてね。そしたらおじいちゃんにも早く食べていただけから」

勝手におじいちゃんに食べさせちゃ駄目よ、と念を押して、美音はハルキを店の外に送り出した。もう本当に暗くなる寸前だ。急いで家に帰さないと、と焦る気持ちが大きかった。

「じゃあね、ハルくん。気をつけて帰ってね」

小さな紙袋を提げ、大きく手を振ったあと、ハルキは飛び跳ねるように帰っていった。

ハルキが店をあとにしてから一時間半後、『ぼつたくり』の電話が鳴った。

店は既に開店、サツマイモの茎を楽しむにやってきましたウメが、いつもの焼酎の梅割りを一呑んだところだった。

ハルくんのおうちの方かしら……と思いつながら受話器を取ってみると、礼儀正しい挨拶が聞こえてくる。

「お忙しい時間に失礼いたします。私、真田と申しますが……」

続けて、息子が大変お世話になりました、という言葉が聞こえる。やはり電話の主は、ハルキの母親だった。いかにも学校の先生らしい、落ち着いたしつかりした話し方である。だが、その声の裏に、あまりにも怪しげな店の名前に戸惑っている様子が窺えた。

「お店を開ける準備をされていたのでしょうか？ そんな時間に、うちの子が面倒をおかけして、本当に申し訳ありませんでした。開店に間に合わなかったりなんてことは……」

「大丈夫ですよ。そんなに面倒なこともありませんでしたし」

既に出来上がっていた料理をお裾分けしたただけだ、と言う美音に、ハルキの母は、ためらいがちに続ける。

「でも……あの子から話を聞き出すのは、大変だったんじゃないやありませんか？」

その言葉から、彼女の常日頃の苦勞が窺われた。きっと、ハルキの言葉のつたなさを詫びる機会が多いのだろう。確かにハルキは語彙が少ないように見える。だが、彼が何も考えていないかと言えば、決してそうではない。むしろ、少ない言葉の端々から聡明さが滲み出ているように美音には思えた。

「正直、最初は戸惑いました。でも、こちらが訊ねたことにはちゃんと答えてくれましたし、問題ありません。というか……ハルキくんは、すごくしつかりした考えを持ってますよね」

『しつかりしている』ではなく、『しつかりした考え』と強調するように言った美音に、ハルキの母親の声が少しだけ明るくなった。

「ハルキは、自分が考えていることを説明するのが本当に下手なんです。家族は慣れているから不自由しませんが、初めて会う方だと特に難しいみたいで……上手く話せないと本人も焦りますし、余計に伝わらなくなってしまうんです」

よくぞ、根気よくあの子の話を聞いてくださいました、と電話の向こうで頭を下げた気配が伝わってきた。

「ハルキくんは、おじいちゃんのことを大好きなんです」

「生まれてからずっと、ハルキの世話は舅と姑に任せきりだったんです。本当によく面倒を見てくれて、あの子もすごく懐いていました。それなのに、こんなことに……」

私が仕事をしていなければ、うちで介護することもできたかもしれないのに、とハルキの母はまた沈んだ声になった。

ハルキの話の中に、『おじいちゃんはパパのパパ』という説明があった。ハルキの母親から見れば舅ということになる。おそらく、介護施設に入所させるにあたっての心理的な壁は相当なものだっ

ただろう。認知症は確かに進んでいるが、自分が仕事さえしていなければ、まだまだ家にいてもらえたかもしれない、と今なお自分を責めているに違いない。

——ノリくんのお祖父さんの問題を聞いたばかりなのに、またこんな話を聞くなんで……

美音は改めて介護問題の身近さを感じながら、慰めるような声を出した。

「差し出がましいことを申しますが……あんまりご自分をお責めにならないほうがいいと思いますよ。私の父がよく言っていたんですけど、人には与えられた仕事があるんだそうです」

「与えられた仕事……?」

「ええ。真田さんの場合、それは学校で子どもにいろいろなことを教えることなんじゃないでしょうか。今までに、真田さんが先生として教え、導いたお子さんはたくさんいるはずですよ。同じように介護施設でお年寄りの世話をするのが仕事という人もいます。それぞれが、それぞれに与えられた仕事をするために、他の人に仕事を任せる。それでいいと私は思うんですけど……」

「そうでしょうか……」

「おそろく。真田さんも旦那様も、おじいさまを思う気持ちをちゃんとお持ちで、なんとかサツマイモの茎を探そうと努力されたんでしょう? ハルキくんはそれを見ていたからこそ、自分も探さなきゃ、って頑張ったんだと思います。ご両親の姿がそうさせたんですよ」

「……そうかもしれません」

「だから、大丈夫です。おじいさまはきつとわかってくださいます。あとは、それぞれが自分の仕事を頑張って、時間が許す限りおじいさまに顔を見せてさしあげれば……」

「そうですね」

電話の向こうで、ハルキの母親はしばらく美音の言葉を囁みしめるように黙っていた。

自分より明らかに年下である美音の、わかったような言葉に反発を覚えても不思議ではない。それなのに、彼女はちゃんと受け止めてくれたようだ。

それは、子どもの生意気な理屈を聞き慣れ、それでも聞き取るべきはきちんと聞き取ってきた教師ならではの姿だろう。美音にはそんなふうに見えるならなかった。

「本当にありがとうございます。気持ちが楽になりました。それで……」

代金をお支払いしたいのですが……と続いた母親の言葉を、美音は笑って否定した。

「ご心配なく。それ、元々無料なんです」

「と、うとうと」

「うちの常連さんが幼稚園からいらだいてきたんですよ。その方はサツマイモの茎のきんぴらが大好きで、この時期になるとうちでお引き受けてきんぴらを作ることになってるんです」

「なんてこと……お客さんからいただいたものを横取りしちゃったんですね……」

しかも好物を……と彼女はこの世の終わりのような声を出す。

きつと、ものすごく真面目な先生なんだろうな……と、美音はハルキの母親にさらに好感を抱く。ここはひとつ、何が何でも安心してもらいたい。そんな気持ちで、美音は極めて明るく言った。

「大丈夫です。サツマイモの茎、けっこうたくさんありましたから」

「そうですか……?」

「ええ、大きな丼にいっぱい。好き嫌いが分かれやすいものでもありませんし、残っても困りません……」

「いいんです。そもそも、あれは子どもさんたちが育てたサツマイモ。いくら捨ててしまう予定の茎だといつても、それで商売するのはさすがに気が引けます。だから、サツマイモの茎のきんぴらはうちの店ではサービスマニユールなんです」

実のところ、無料で得たもので商うことはいくらでもある。

人參の葉もそうだし、ウメが毎年大豊作にするゴーヤもそうだ。けれど、さすがに子どもが育てたものはためらわれる。譬とも相談した結果、ウメが持ち込んでくるサツマイモの茎は、『お好きな方はいくらでも』ということで、鉢ごとカウンターに置くことにしたのだ。手間がかかるのに一銭にもならない。ウメがいつも悪いね、と繰り返すのもそのせいだった。

「どうかお気になさらないください。もしも、おじいさまが気に入ってくださったら、来年もお裾分けします。連絡先を教えてくださいなれば、作ったときにお知らせしますよ。来年も、再来年も、

その次の年も、ずっとずっとお元気で、召し上がっていただけるといいですね」

「はい……本当に……」

美音の言葉に声をつまらせながら、ハルキの母親は自分の電話番号を告げる。

今度、お店におじゃまさせていただきます、と言い添えて彼女は電話を切った。

「はあ……よかった!」

カウンターの隅に置いてある電話が鳴った瞬間から、話の成り行きに耳を澄ませていた譬が安堵の息を漏らした。ところが、ウメはなぜか複雑な顔をしている。焼酎しょうちゆうの梅割りもちつとも減っていなかった。

「どうしたの、ウメさん?」

と、美音が訊いてみると、ウメはちょっと切なそうに言った。

「いやね、あたしももつと年を取ってほけちゃったら『サツマイモの茎』って言うのかと思ってさ」  
頭も身体も元気なウメにそんな日がくるなんて想像できなかった。けれど、こればかりは誰にもわからない。美音に言えることはひとつだけだった。

「もし、ウメさんがそうなっても、ちゃんとお届けしますよ。それこそ毎年、毎年、あおはずく幼稚園の園長先生にウメさんの分だってお願ひして」

隣で大きく頷きながら、馨も付け加える。

「あたしが届けるよ！ あ、もちろん焼酎の梅割りと一緒に！」

「馨、梅割りはどうなの？」

「あーいいねえ、梅割りとサツマイモの茎のきんぴら。それならばけても安心だ」

「うん、安心安心！」

「えーっと、ごめんなさいウメさん、何が安心なのかしら？」

「さあ……なんだろう？」

三人はそこで大笑いし、ウメはまた小皿に少しだけサツマイモの茎のきんぴらを取る。

そして、この胡麻油の香りがどうにも……と本当に美味しそうに口に入れた。

十

「ところで、これはなに？」

カウンターのの上に置かれた大ぶりの鉢を見て、要が訊ねた。ちなみに、鉢の中身はほとんど残っていない。いつもどおり要は閉店間際に来店し、常連たちが散々食べて帰ったあとだからだ。

「なんだと思われませんか？」

「なんだと訊かれても……露みただけど今は季節じゃないし、小松菜とはちよつと違うし、見当がつかないな」

「ご覧になったことあると思いますよ。学校とかで……」

「学校？ いやもう、全然わからない。降参！」

「やけにあつさり諦めますね。実はこれ、サツマイモの茎なんです。好きなお皿にとつてお召し上がりください」

自分で好きだけ取る、という見慣れない提供方法を不思議に思った要は、美音から説明を聞いて驚いた。

「サツマイモの茎……しかもサーブスなの？」

「ええ。召し上がったことありますか？」

「いや……ない。でも、確かに学校を見たな」

知識として、食べられるということは知っていたが、食べたことはおろか、料理されたものを見たのも初めてだった。

「だど、思いました。もうあまり残ってませんが、よろしければお試しください」

「ああ。でも……これ……」

旨いのか？

そんな言葉が顔に浮かんでいたのだろう。美音はクスリと笑って答えた。

「美味しいのか、ですか？ さあどうでしょうねえ……。うちのお客さんたちは気に入ってくださってますけど……」

そして美音は、もう最後ですから……と残り少なくなった鉢の中身を全部小皿に移し、要の前に置いた。

——サツマイモの茎ねえ……

要は小皿の上の料理をマジマジと見つめた。

サツマイモの茎は戦時中、食べる物がなくてやむなく食用にされたと聞いたことがある。おそろく、美音が味について言及しなかったところを見ると、大して美味しくもないのだろう。積極的に食べたいものじゃない。

でも……と要はなおもサツマイモの茎を見て考える。

『ぼったくり』で不味いものが出されたことなどない。だからきつとこれも旨いはず。素材がどんなものであれ、美音の手にかかれば大変身なんて日常茶飯事……

そう判断し、要は箸でつまみ上げたきんぴらをえいやつと口に突っ込んだ。

「あ……胡麻油だ」

「要さん、お好きでしたよね？」

「ああ。それにこれ、すごくしゃきしゃきしてる！」

思わずそう言ってしまうほど、サツマイモの茎はしっかりと食感を残していた。

露ほどの香りは立たない。むしろ香りとしては、炒めるのに使った胡麻油が圧勝ではあったが、なんとも言えない甘みがある。しかもその甘みは実に控えめで、サツマイモそのものとはまた違う。確かに一度知ったら癖になる味だろう。年に一度、この時期にしか食べられないとすれば、熱望する気持ちもわからないでもない。

一箸二箸と大事に口に運ぶ要に、美音がグラスを用意し始める。一杯目の酒は既に呑み干した。お代わりをすすめるタイミンゲだと思っただろう。

「どうせなら、お酒も九州のものにしましょうか」

「九州の酒……さては、サツマイモつながりで芋焼酎？」

近頃美音は、焼酎や泡盛の研究に余念がない。要も時々味見役を仰せつかるが、今日はあまり焼酎の気分じゃない。できれば続けて日本酒が呑みたかった。

「申し訳ないけど今日は……」

そう言いかけた要を片手で制し、美音はにっこり笑った。

「焼酎じゃありません。今日のおすすめは日本酒です」

そして美音が取り出したのは、緑の瓶に真っ白なラベル、そのラベルの真ん中に勇ましく赤い文

字で『純米吟醸 熊本神力』と書かれた酒だった。

「熊本にある千代の園酒造という蔵のお酒です」

「へえー熊本……じゃあやっぱり甘いのか？」

「まあ、呑んでみてください」

西の酒は甘くてしつかりした味わいのものが多い、と認識している。おそらくこの酒もそうなのだろう……と思いつながら口に含んだ要は、そのコクとほのかな辛さに驚かされた。

サツマイモの茎のきんぴらはあまり主張の強い料理ではなかったが、酒の辛さが自然な甘みを引き立たせ、料理の印象を深くする。こつてりした料理を酒がすつきりさせるといのは何度も経験していたが、その逆なんて初めてだった。

「なんとも粋な組み合わせだな……」

「でしょう？ 阿蘇の伏流水で仕込んだお酒なんですって」

「阿蘇の伏流水か……聞くだけに旨そうだな。神力って名前はどこから？」

「酒米の名前です。明治二十年から昭和十年ぐらいまで、西日本でよく使われていたお米なんです。稲が倒れやすくて一反あたりの収穫量が少ないってことであまり使われなくなっちゃったんです。その神力を復活させて、新しいお酒を造ったのが千代の園酒造さんなんです」

「ぜんぜん知らなかった。今日は知らないものばかりだな」

「よかったですね、新しい味に出会えて」

「まったくね」

そう答えた要の顔を、美音はじつと見る。きつと、要の腹具合を表情から読み取ろうとしているのだろう。

いつもよりずっと落ち着いている要の様子を見て、美音は安堵した。

「今日は、お昼をちゃんと召し上がったみたいですね？」

「ああ。ランチミーティングだった」

要の答えを聞いたとたん、また眉間に微かな皺が寄る。

珍しくちゃんとお昼ご飯を食べられた理由が、仕事がらみの昼食会……。相変わらず、ものすごく忙しいのね……と、ため息が出そうになった。

会社が忙しいのはいいことだし、要が兄や祖父から頼りにされているのもわかる。けれど、食事のままならぬほどの忙しさは、やはり心配としか言いようがない。

要は普段から帰宅が遅いし、出張も多い。一緒に住んでいるとはいえ、要の母親も息子の食事までは管理しきれないだろう。かといって、毎日『ぼったくり』で食事をするわけにもいかない。

美音は、要の普段の食事が気になってならなかった。

「もう、いっそ毎日ランチミーティングにしてもらったらどうですか？」

そうすれば、昼食だけでもまともな食事が取れる。そんな思いから口にした言葉に、要はぎよつとしたような顔になった。

「勘弁してくれよ。確かに取引相手との食事だから、けっこうちゃんとした料理んだけど、打ち合わせしながらなんてちつとも旨くない。話をしてるうちに料理も冷めちゃって、熱いものを熱いまままで食べることもなんてほとんどないんだ」

「それは残念ですね」

「つてことで、なにか熱々で旨いものが食いたいな」

そう言いつつ、要は品書きに目をやった。

「おすすめは？」

「そうですねえ……千切り葱の豚肉巻、とかいかがでしょう？ 焼きたてをお出ししますし、ピリ辛でビールにぴったりですよ」

千切り葱の豚肉巻は、五センチぐらいの長さの千切りにした葱を、薄切りの豚肉で巻いたものをフライパンで焼き、みりんと醤油と酒、そして豆板醤をまぜたタレを絡ませたものだ。一般的に豚肉で葱を巻く場合、そのままの太さで使うことが多いが、千切りを使うところが『ほったくり風』である。

もっと寒くなれば、たつぷりの千切り葱と豚肉を小さな鍋でしゃぶしゃぶとして供したりもする。

千切り葱の豚肉巻はビールやウイスキー、しゃぶしゃぶは日本酒や焼酎にぴったり。いずれも軽く火を通した千切り葱の甘みと、しゃぶしゃぶした菌触りがたまらないと客たちに人気だった。

「お、いいね。じゃあそれ。あと、ビールは？」

『飛驒高山麦酒』がおすすめです。ピルセナー、ヴァイツェン、ペールエール、ダークエール、スタウトの他に、瓶の中で二度目の発酵をさせたカルミナって種類もあります」

「ピルセナーじゃなくて、『ピルセナー』か……独特だね」

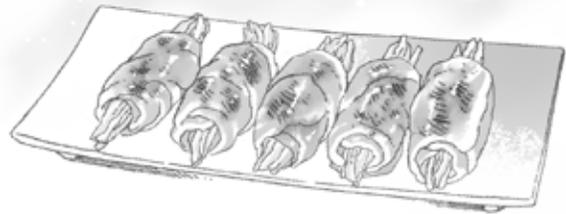
『飛驒高山麦酒』は、岐阜県高山市にある有限会社飛驒高山麦酒による地ビールである。美音があげたとおり、何種類ものビールがあるが、要が選んだのはやはり『ピルセナー』。

彼の、ビールはまずピルセナーありき、という、いかにも日本人らしい好みがありありと窺えた。

ほどなく、料理が出来上がった。

要は皿を目の前に置かれるやいなや、千切り葱の豚肉巻を頼張る。

「葱は甘くてしゃぶしゃぶだし、肉は熱々でピリ辛。このビール、ちょっと苦みが強いけど、それが本当にぴったり。やつぱりこういうのは出来たてに限る。いくらとびきりの和牛ステーキでも、冷え切ったら興ざめだ。さっきの話じゃないけど、ランチミーティングなんて何を食ったか覚えて



ないことのほうが多いんだ。そんな食事をするぐらいなら、  
いっそ腹を空かせたままでいい」

「それは大間違いです！ 胃にも腸にも絶対よくありません！ ……あ、ごめんなさい……」

心配のあまり、つい強い口調になってしまったことに  
気づき、美音は慌てて謝った。

「……いや、こっちこそ。心配してくれてありがとう」

君の気持ちはありがたいけど、現状では改善するのが  
難しい問題なんだ……と、ちよつと諦めたような顔で言っ  
たあと、要はサツマイモの茎のきんぴらに話を戻す。熱々  
の料理を先に食べようとしたため、皿にはまだきんぴら  
が残っていた。

「そういえばさ。うちの爺ぢいも、サツマイモの茎の話をし  
たことがあったな」

相変わらず『爺』なのか……と苦笑しながら、美音は  
訊ねた。

「要さんのお祖父様は、サツマイモの茎なんて召し上がったことはないでしょう？」

なんとなくではあるが、サツマイモの茎は『困窮』という言葉と隣り合わせの存在のような気がする。そして美音には、佐島建設の創業者にそんな言葉は不似合いに思えた。だが、要はあっさり  
首を横に振った。

「それが、あるんだってさ」

「戦時中？」

「俺もそう思って訊いたんだけど、違った。なんか、どこかの田舎に土地買収に行ったときに、お  
茶請けに出されたんだってさ」

「農家の土地でも買いに行かれたんでしょうか？」

「たぶんね。で、食べてみたら旨うまかった。すごく気に入ったのに、それっきり食べる機会に恵まれ  
ないって嘆いてた」

佐島建設の会長様が、サツマイモの茎が食べられないと嘆くなんて……と美音は不思議な気持ち  
になる。でも、要がそんなことで嘘を言う必要なんてない。彼の祖父がサツマイモの茎を食べたがっ  
ているというのは本当なのだろう。

そもそも、ハルキの祖父にしても、どこでサツマイモの茎を食べたのかも、なぜ気に入ったのか  
もわからない。本人の記憶は深く沈んでしまい、もう取り出しようもないらしい。

それでも『食べたい』という気持ちだけが残っているのだ。人の記憶というものは全く不思議だ  
と思う。それ以上に『これを食べたい』と思う気持ちが、どこからどのように湧いてくるのかが不  
思議だった。

いずれにせよ、食べたいものがあるなら食べてほしい。たとえそれが、つい最近とんでもない嫌  
がらせを仕掛けてきた相手であつても……

そう思った美音は、ふと空っぽの鉢を見て困り果てた。

「えーっと……どうしましょう？」

「なにが？」

「サツマイモの茎は、それで終わりなんです」

美音がそう言ったとたん、要は皿に残っていたサツマイモの茎のきんぴらを全部口に放り込んだ。

「要さーん！」

驚く美音を尻目に、要は口の中のきんぴらをしっかりと噛んでごつくと呑み込む。

そして、してやったりという顔で美音に言った。

「あんなくそ爺おじいちゃんに食わさなくていい」

「ひどい……」

咎めるように言ったあと、美音は笑い出してしまった。

おそらく要は、たとえ一箸はしでも要の祖父に味わってほしい、という美音の気持ちを読み取ったの  
だろう。微妙に渋い顔で、彼は言った。

「あの爺に美音の料理を食べる資格なんてない。いくら長年食べたがついていたサツマイモの茎でも  
いや、食いたがつてるからこそそのペナルティーだな。君にあんな嫌がらせをしたんだから当然だよ」

「だってそれは、要さんを思つてのことだったんでしょ？」

「それにしたつてだ」

「厳しいんですねえ、要さんは」

茶化すように言う美音に、要は苦笑いを浮かべた。

「おれは普通。君がお人好しすぎるんだよ」

そう言われればそうかもしれない。店を潰してしまうと泣きじゃくったくせに、その元凶である  
要の祖父に何とか好物を味わってほしいと願ってしまう。お人好しというよりも、ちよつと足り  
ないのかもしれないと自分でも思うほどだった。でも、せっかく作つたのだから、食べたがつてい  
る人に食べてほしい。それはおそらく、食あきなを商う人間の習性ではないかと美音は思つていた。

「まあ、サツマイモの茎のきんぴらは来年も作れます。そのときにお届けしましょう」

「もしも、あのくそ爺がこれ以上美音をいじめなければ、食あきなわせてやつてもいい」

「もうないんじゃないですか？ 目的は達成したみたいですよ」

要の本気度調べも、美音の人柄調べも終わったはずだ。ふたりが付き合うことについて、彼らがこれ以上の異議を挟むことはないだろう、と美音は考えていた。だが、次に要の口から出てきたのは、美音が予想もしなかった台詞だった。

「どうだか。今は収まっても、おれが君を佐島美音にするって言い出したら、どう出るかわからない」

——佐島美音……？

要は当たり前のように、その名前を口にした。

そして、それを既定の事実として、なおも祖父の悪口を言い続ける。

しばらくして、ようやく絶句している美音に気付いた要は、さらに美音が固まるようなことを言った。

「そういえばお袋に、家をどうするつもりだって訊かれたよ。あそこに住むのか、それとも別に探すのか、早めに決めてくれて言ってくれ。どうする？」

どうするもこうするも、私にはこの店があるし、まだ饘だっているし、あそこか言われてもどっちのことかわかんないし、要さんの家にしたって部屋にしたってここに通ってくるには遠すぎるし、大前提として、申し込まれてませんから、な・ん・に・も!!

と、美音の頭の中は大混乱だ。

それなのに要は、あれ、まだ言っていなかったっけ？　みたいな顔をしている。

「君がそばで見張ってくれたら、おれは毎日ちゃんと飯を食うよ。君がつくる飯をしつかり食えば、たまに昼飯ぐらい抜いても平気だろう。そしたら、君の心配も相当減るはずだけど？」

そして要は、にっこりと笑って言った。

「とということ、なるよね、佐島美音に？」

美音が手にしていた鉢が、洗い桶の水の中にはしゃんと落ちた。